

自由研究報告

信田敏宏・上田達

研究大会 2 日目、午前中のセッションは 4 つの個別研究の報告であった。私は、前半の 2 つの報告の司会役を担当した。それぞれの報告の内容については、報告者による発表要旨を読んでいただくとして、ここでは、私見を交えながら、当日の様子を描写してみたい。

岡本義輝会員は、マレーシアにおける日系企業と外資系企業の企業戦略の比較を通して、日系企業が直面している人的資源管理の現状と課題を報告した。宇都宮大学大学院で学び、現在は宇都宮に在住されている岡本会員の語り口が、意外にも関西弁(おそらく)であったのは、何とも言えない親しみをおぼえるものであった。さらに、ここでは差しさわりがあるので詳しく書けないが、日系企業に対する岡本会員の忌憚のない意見は会場の笑いを誘った。報告は、テンポよく進み、きっちりとしたデータが示され、説得力のある議論が展開されていたこともあり、質疑応答でも盛り上がりを見せた。まず、宮崎恒二会員による興味深いコメントと質問がなされた。質問はキャリアパスのあり方や、大学への研究開発の委託についてであった。興味深かったのは、マレーシアで日本企業が抱えている問題が、現在の大学組織が抱える問題にも共通しているのではないか(つまり、そこには日本的な何かがあるのではないか)という宮崎会員のコメントであった。その次に、手を挙げられたのは、若井尚会員であった。若井会員も岡本会員同様、定年退職後大学院で学んでおられる方である。若井会員は、1967 年～1969 年のマレーシア滞在の経験を踏まえながら、現在のマレーシア在住日本人企業関係者について質問された。若井会員からは、ご自身

はマレーシアなど海外に日本人を派遣する立場(本社に勤務されていたということだと思われる)にあったとの発言があった。対照的に、岡本会員は定年を前にして突如としてマレーシアに派遣された側の立場であった。そのお二人が研究会の場で交流できたのは、JAMS ならではのことではなかろうか。ちなみに、若井会員は、現在成城大学大学院にて文化人類学を学んでおられ、オンライン・アスリについて研究してみたいとのことであった。

2 人目の報告者である綱島(三宅)郁子会員は、多くの会員がご存知のように、ここ数年にわたって、マレーシアのキリスト教について、JAMS の研究大会などで報告を続けられている。今回も、これまでの一連の研究の流れの中に位置づけられるものであった。報告は、およそ 2 部構成であった。前半では、「プラナカンの新約聖書」についての現地調査による最新の成果を写真やスライドを交えながら報告された。後半は、プラナカンおよびババ・マレー語という観点からの話をレジュメに沿って話された。後半、少し時間がなくなって駆け足になってしまったのが、いささか残念であった。時間が押していたこともあり、質疑応答の時間があまり取れなかったが、西尾寛治会員による示唆に富むコメントと質問がなされた。コメントは、博識の西尾会員らしく多岐にわたるものであったが、ジャウィの復権が見られるマレー人世代の話、プラナカンの分かりやすい説明と地域名を冠したプラナカンについての指摘、さらには、punya という言葉についてのコメントと質問がなされた。マレー語について、現在ブルネイ在住の佐藤宏文氏について西尾会員が言及さ

れた時は、佐藤氏にお世話になったことを思い出して、私は言いようのない懐かしさがこみ上げてきた。

お二人の報告は、内容的にも盛りだくさんなものであり、お二人が、忍耐強く、しかも精力的に研究を続けられていることが伺えるものであった。今回、ひょんなことから、関西在住の研究者として大会委員の多和田先生より司会役をおおせつかったが、新たな知見を得ることができた。お二人の発表者、そして多和田先生に感謝を申し上げたい。
(信田敏宏)

＊

午前中に開催された個別研究報告セッションの後半部では、二つの研究報告がなされた。まず、都築一子会員(NPO SV 経験を活かす会)が「マレーシア・サバ州におけるゴム廃園の活用—自然環境保全とエコ・ツーリズムに向けた取り組み」と題して研究報告を行った。同報告は、英領北ボルネオにおける鉄道の敷設を概観した後で、ゴム産業導入の経緯とその発展、さらにはその後／跡を示すものだった。ゴム産業は1960年代末をピークとして、その後、基幹産業としての地位を明け渡す。鉄道の沿線にあった大規模なゴム園は規模を縮小するか、他の換金作物のための土地へと変わる。こうした流れの中で、発表者が焦点を当てるのは、かつてのゴム園がサバ州の観光産業を担う可能性をもつ施設へ変更される事例である。ロック・カウイ・ワイルドライフ・パークと SAFODA キナルート・エコ・フォレスト・パークは、いずれもゴム廃園に建てられた施設である。いずれも豊かな自然環境を有するため、エコ・ツーリズム促進のための施設へ整備することが課題として残されていると報告者は問題を提起して報告を終えた。

都築会員の報告について、西尾寛治会員と山本博之会員から、公園として保全と開発をする際に、州政府のほか国外や民間からはどのようなアクターが参与しうるかなどの質問やコメントがあった。

次に、伊賀司会員(神戸大学博士課程)が「東南アジアにおけるインターネットの展開—マレーシアとインドネシアの事例から」と題した研究報告を行った。伊賀会員は、両国におけるメディアの新しい媒体として、積極的な情報発信を行うサイトやブログの現況と、それが社会にもたらしているものについて報告した。接続環境の整備により、インターネットはホームページを閲覧するといった書き手から読み手へ向けられた一方通行のメディアとしてではなく、相互に交流・参照することで代替的なコミュニケーション空間を形成する場へと変わりつつある。発表者が示唆するのは、インターネット上の仮想的な社会が対面的な実際の社会的文脈へと接続される可能性である。

伊賀会員の報告について、山本博之会員、篠崎香織会員、吉村真子会員らから質問がなされた。応答の中で、ネット上でのマレーシアとインドネシアの国境を越えた共闘や連帯の可能性、さらには実際の政治情勢への影響という側面から両国の比較などについて報告者から補足的な説明がなされた。

第一報告と第二報告はいずれもマレーシアにおける特定のモノなり現象を捉えているのみならず、開発、ツーリズム、メディア、社会運動など広く共有しうる主題のもとに論じられていた。そのため、フロアとのコミュニケーションが活発に行われ、報告されたこと以上のものが語られ、示唆され、明らかにされたように思う。
(上田達)